

コモンズと入会の倫理的基盤：スチュワードシップの意義

著者	長谷部 正
雑誌名	農業経済研究報告
巻	36
ページ	1-9
発行年	2004-10-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/33439

コモンズと入会の倫理的基盤

—スチュワードシップの意義—

長谷部 正*

目 次

- | | |
|--------------------------------------|---------------|
| 1. はじめに | 5. コモンズの倫理的基盤 |
| 2. 農村風景とその修復・保全 | 6. 入会の倫理的基盤 |
| 3. 農村風景と「土地の倫理」 | 7. むすびにかえて |
| 4. 農村風景の修復・保全とカントリーサイ
ド・スチュワードシップ | |

1. はじめに

内山節が著書『自由論』のなかで、興味深いフランスでの川釣りの経験について述べている。フランスでは多くの川が個人所有であるため、釣りをしようとする入漁権だけでなく所有者から「河川立入権」を購入しなければならない。しかも、さまざまな慣習があってそれは容易には購入しがたく、釣りはおろか川岸に立つことさえできない。これは、河川が公共のもので、入漁権さえ手に入れば容易に釣りができる日本とは対照的である。内山はこの経験をもとに欧米における自由の論議の系譜について述べているが、川はみんなのものという観念にとらわれているわれわれにとって、彼の経験はその常識的理解を超え、むしろ新鮮な驚きでさえある。

本稿では、イギリスのカントリーサイド・スチュワードシップ事業を参照しながら、コモンズと入会の利用を支える農地と人間との関係について考察する（彼の議論で理解されることと思われるが、本稿では人間同士の関係である倫理を拡大解釈している）。次節からの考える視点を、農村風景の修復・保全におき、そこから農地の利用に関してイギリスと日本の比較を行うという形式で議論を進める。

2. 農村風景とその修復・保全

経済の高度成長期以降、農村に求められてきたのは、効率のよい生産が行われる場としての役割であった。農村風景に関する代表的な論者である勝原文夫〔11〕は、農村風景が産業としての農業によって創られるという側面を無視しえないので、農村風景において単なる「美」ではなく、「用」と「美」の両側面から検討する必要があると述べた。

事実、農業の近代化により農業生産におけるめざましい技術革新がみられ、種々の農業施設や農業機械は農村風景を大きく変えた。農業の生産基盤を改善するさまざまな事業によってもたらされた近代的な農業は、田園をいわば「工場化」したという否定的な見方も

* 東北大学大学院農学研究科環境経済学分野教授

ある。ここには、「ふるさと」の風景としての農村風景が衰退しつつあるという思いが重ねられている。また、現在、生産調整によって耕作放棄が拡大し、人々がそこで働き、生活の様子を浮かび上がらせることのできる農村風景はますます失われつつある。これは中山間地において顕著である。

小田切徳美〔18〕は、中山間地が「人の空洞化」から「土地の空洞化」へと進み、現在は「ムラの空洞化」の局面を迎えていると述べている。「ムラの空洞化」の表現で強調しているのは、地域の経済的疲弊が点的にではなく面的に現象しているという危機的状況である。小田切のいう「ムラの空洞化」は風景において端的にみられる。

このような農村風景を取り巻く状況は、風景の修復・保全を大きな課題として浮かび上がらせている。この点は、農村のみならず都市においても同様であることを西村幸夫〔16〕が指摘している。

本稿では、都市でも中山間地でも風景の修復・保全が課題とされるのは、われわれの社会が依拠する基本モデルの推移によるとみなしている。この点に関し、佐藤俊樹〔19〕の近代日本に関する仮説に基づいて考えたい。佐藤は、「ある社会が固有に持っている社会理論」、あるいは、「その社会がもっている公式の社会像、設計図」を「一次モデル」と呼び、近代日本には、「欲望自由主義」、「法の社会工学」、「心情の政治学」、「超共同体論」の4類型があるとする。それぞれについての簡単な説明は次の通りである。

- (1) 「欲望自由主義」（個人の欲望の自由を前提にしつつ、それが結果的に社会全体のためにもなるという予定調和論理）
- (2) 「法の社会工学」（個人の欲望の自由を前提にしつつ、その無秩序な発動を社会の側で外的に調整していくという論理）
- (3) 「心情の政治学」（個人の欲望の自由を前提にしつつ、欲望に内在する別の社会性の回路によって社会を構成するという論理）
- (4) 「超共同体論」（個人の欲望の自由を前提を否定して、個人を社会の内部に再び回収しなければならないという論理）

佐藤は、近代日本社会の特徴を「法の社会工学」と「心情の政治学」を2つの焦点とする楕円型であると規定する(図略)。そして、「法の社会工学」の論理が極端に強まると「欲望自由主義」となり、「心情の政治学」の論理が極端に強まると「超共同体論」になると説明する。近代日本社会は、単独では十分な社会理論となりえない2つの一次モデルに依拠している。近代日本社会は、(無限ともいえる)欲望を持つ個人が自発的に構成した社会とはいえない。逆に言えば、近代日本社会は個々人の存在に根拠を持っていない。肥大する欲望を持つ個人にとって社会は制約となる邪魔者でしかない。このような社会と個人の対立という困難を解消する存在として天皇が位置づけられている。

ところで、分配しうるパイが増大する経済の高度成長期には、「欲望自由主義」が全開した。この時期には個人と社会の相剋の調整役としての天皇の役割も後退する。現天皇の1959年の「結婚」は、欲望のメディアの代表であるテレビの普及に貢献したのみならず、都市近郊への人口定着の基盤である近代的家族の精神的支柱となった(理想の近代家族としての皇太子(現天皇)家族)。このような状況下で都市でも農村でも個人の欲望を反映し、

公共空間への配慮を欠いたまま建築物の新築・改築がなされ、風景も変化したと考えられる。

やがて時代は変わって、分配しうるパイが増大を期待しえない経済社会状況となって、一次モデルの重心を「欲望自由主義」から「法の社会学」や「心情の政治学」の方向に移動せざるをえなくなっている。経済のグローバリゼーションが「欲望自由主義」を促しても、分配すべきパイが大きくなる中では、個人と社会の相剋はむき出しとならざるをえない。しかも、特に1970年代半ばを境に風景や景観意識は著しく変化した。その後、80年代の「都市の発見」（その象徴的表現としての「東京一極集中」）を経て、90年代後半にいたってようやく公共空間としての風景の問題に突き当たり、都市でも農村でも風景及びその修復・保全が課題として提起されるようになった。

3. 農村風景と「土地の倫理」

日頃身近な農村風景をみて憩い、安らぎを覚えるのに対価を支払うといようなことはしない。農村風景の例のごとく市場（内部）での取引を経由しないで安らぎを与えるなどの影響を及ぼすことを農村風景の「外部効果」といい、そのような効果を持つことを「外部性」と呼ぶ。市場取引を伴わないことは市場がうまく機能していないという意味で、「市場の失敗」という現象の一つに数えられている。

農村風景を考える手がかりとして、近年研究が盛んな「コモンズ」(commons)の概念を参照するのが有効であるように思われる。コモンズとは、その利用に関わる人々全員のもの（共有資産）である。本稿では、美意識をもって見られる景観を風景とみなしており、視覚による客観的な眺めである景観とは区別して考えられ、また、それは市場で取引引きされる私有財とは異なる性質を持つ。その点「コモンズとは、対象となる自然環境や自然資源そのものをさすというよりも、それぞれの環境資源がおかれた自然条件の下で、持続可能なたちで利用・管理・維持するための制度・組織であると把握されている」（植田〔25〕166）研究状況は風景の議論にとっても有用である。ただし、コモンズは、あくまでも当該対象を「利用する」ことを念頭に置いて作られた概念である。

ところで、農村風景を考えるうえで生態学視点は重要であり、しかも分析的な方法によって風景を研究するのがランドスケープ・エコロジーである（註1）。

井手任〔8〕は、農村地域における「生態的回廊（コリドー）」に注目する。コリドーとは「周囲の景観とは異なる性質を持つ帯状の構造」のことをさす。そして、このコリドーの環境維持や修復が生物の種の多様性を維持する上でもきわめて大きな役割を果たしている。しかも、「河畔の植生帯や、段丘崖に連続して残る樹林、防風林など、農村の景観形成要素のなかにもコリドー構造をもつものが多くある」（井手〔8〕114）このことは、さまざまな生物の生息する場所がパッチワーク状の様相を示す農村風景をいわば帯状のコリドーによって連結させていくことの重要性を示唆している。

しかし、農村風景を捉える方法として、ランドスケープ・エコロジーで十分かと言えば、決しそうではない。ランドスケープ・エコロジーは、「自然の全体像」の把握を目標としてかかげているが、農村風景を考察する議論としては不十分である。

この点、環境倫理学の先駆者の一人である生態学者Aldo Leopoldの「土地の倫理」(Land Ethics)の考え方が参考になる。生態学者であるLeopoldは「生存競争における行動の自由

に設けられた制限」(Leopold [12] 316)を倫理と定義し、それを「共生」と結び付けて考えている。

また、Leopoldは土壌、水、植物、動物などを総称して土地と言っている。つまり、彼は生態系のことを土地と称していると理解できる。そして、彼のいう「土地の倫理」とは、「人間と、土地および土地に依存して生きる動植物との関係を律する倫理則」(Leopold [12] 317)のことである。

Leopoldは、人間の関心が人類共同体から生命共同体に向かわざるを得ないこと、したがって、「人間の自然権(人権)」から「自然の権利」あるいは「土地(=自然)の自然権」を重視しなければならないことを主張する。彼の考え方の特徴は、「個人の倫理(第一段階)→社会の倫理(第二段階)→土地の倫理(第三段階)」というように倫理に対する段階的な推移があるとする点にある。

Leopoldは土地利用を考える視点に関して次のような提案をしている。

「適切な土地利用のあり方を単なる経済的な問題ととらえる考え方を捨てることである。ひとつひとつの問題点を検討する際に、経済的に好都合かという観点ばかりから見ず、倫理的、美的観点から見ても妥当であるかどうかを調べてみることだ。物事は、生物共同体の全体性、安定性、美観を保つものであれば妥当だし、そうでない場合は間違っているのだ、と考えることができる。」(Leopold [12] 349)

本稿では、コモンズとしての農村風景という視点に加えて、このLeopoldの発想にならない農村風景を「倫理的、美的観点」から把握することしたい。なぜなら、わざわざランドスケープ(風景)と銘打つ以上、単に生態系としてのみ論じるだけではなく、一定のまとまりをもった空間それ自体が持つ倫理的、美的観点をも考慮に入れる必要があると考えられるからである。このことは、風景という言葉がもともと「まとまりがある眺め」(山岸[26] 9)を指し、また、倫理が「人々がまとまりを得るときの秩序・規範であり、人間関係の理法」(星野・三嶋・関根編[5] 1)であることにも対応している。

4. 農村風景の修復・保全とカントリーサイド・スチュワードシップ

Leopoldは「土地の倫理」を考えるに当たり、「所有」ということを常に念頭においている。つまり、彼は生態系(土地)がはたして人間のものなのかという根源的な問いかけをおこなっている。これまで人間中心主義の考え方のもとに人間にとって都合がよいように生態系(土地)は人間のものとされてきた。この裏返しの考え方が、生態系の秩序にしたがって世界を構成すべきであるという生態系中心主義(ecocentrism)である。これに対して岩佐茂[10]は、人間中心主義が環境問題を引き起こしたからといって、環境を問題にするにあたり「自然の権利」を持ち出すのは、少し安易ではないのかという反論を行なっている。つまり、環境倫理は人間相互の関係を論理的に明確に提示するものであることをきちんと押さえておく必要がある、というのが岩佐の主張であると考えられる。

いずれにしてもわれわれが議論している農村風景を含めたコモンズは、誰の所有でもないため、みんなが利用するだけで誰も管理しないことになりかねない。まさに、市川達人が述べるように「私的な所有とならない環境は、ただたまたまそこにあるにすぎない。」(市川[6] 132)という状況である。

Garret Hardin [3] はコモンズが無制限に利用される可能性があるため資源が枯渇して

しまう「コモンズの悲劇」の問題が発生することを述べた。この問題に対して示したHardinの解決策は、コモンズの私有化を図ることである。Leopoldも同様の考えを主張している。

「私有地の地主のほうが倫理的な義務感を持つこと—これが、現状に対処できる、唯一の実効ある救済策である。」(Leopold [12] 333)

実際、このような考え方に基づきイギリスではカントリーサイド・スチュワードシップ事業(Countryside Stewardship Scheme)という政策が行われている(註2)。この事業の目的は、「価値あるイギリスの景観および野生生物生息地を保護するとともにその価値を増進すること、また国民が田園地域を享受する機会を増大させること」(柘植 [22] 129~30)である。事業は当初田園地域委員会によって1991年に始められ、1996年から農漁業食料省に引き継がれた。イギリスにおけるカントリーサイド・スチュワードシップとは、田園地域において農業に関わる者が英国の貴族制度を支えてきた執事(スチュワード)のごとく農地を含めた地域環境の保全管理を行うことを意味する。イギリスにおけるスチュワードの役割を担うのは多くの場合地主層である。

5. コモンズの倫理的基盤

農村風景を美意識をもって眺めることのできる共有資産としてとらえたとしても、規制がない場合にそれを維持することの困難性は「コモンズの悲劇」が論理的に示している。

「私有地の地主のほうが倫理的な義務感を持つ」というLeopoldの主張の背景には、社会の中で自立した個人である地主が田園地域の執事(スチュワード)としてボランティアに土地(生態系)を保全していくことに対する期待がある。このような地主の行動は、David Colman [2] が指摘するように利潤や効用の最大化ではなく、自らの利益を犠牲にして外部不経済の是正をはかるものであると理解することもできる。

このカントリーサイド・スチュワードシップの考え方を遡るとジョン・ロック(John Locke)の所有権の思想に到る(註3)。ロックは、人間活動を突き動かすものとして自己保存への欲望が根底的なものであるとみなした。つまり、彼は生きる権利(生存権)が第一義的なものであり、それは自然権をも規定すると考えた。ロックによれば、神によって賦与された土地は自然権であり、それに対して人間労働を投下して形成される農地や生産物は当事者の所有に帰すと主張した。彼は、効率的な生産を行なう地主への土地の集中を容認している。このロックの考えが「コモンズの悲劇」に対するHardinの私有化という解決法に引き継がれている。

ところで、ロックの議論には、土地や生産物が十分にあり、利用可能であるといういわゆる「ロック的但し書き」の制約が課せられている。この点に関しては、二つに分けて考える必要がある。

①土地や生産物が十分存在する点について

これは、例えば私が土地を利用することによって、他人の利用や収穫物の多寡に影響を及ぼすことがないほど十分な土地があることを意味している。これは、誰もがアクセス可能であるコモンズと同様の発想である。西欧におけるコモンズは「だれのものでもないと同時にみんなのものでもある」(秋道知彌 [1] 33)という前提に立っており、悲劇を発生させる端緒になっている。ここでロックの考え方を敷衍して言うならば、地主は神によって(自然権である)土地を利用する「信託」を付与されてスチュワードとしての役割を担っている

といえよう。

②利用可能であることに関して

これは、労働によって生産したものを腐らせたり、あるいは浪費したりしないことを意味している。土地所有に関しても同様で、草や果実が腐った土地は誰が所有してもよいものとみなされる（註4）。

但し書きのこの部分に関して一ノ瀬正樹〔7〕は次のように述べている。「単なる生命維持という次元を越えた、すぐれて人間的な生活の次元での利便性を活用することが所有権に内包されていなければならないのである（一ノ瀬〔7〕232）」自ら働き生産物として作りあげたものを所有することができるが、それはあくまでも生産物を腐敗させず、あるいは浪費せずに使用するという制約の範囲内においてのことである。あるいは多少の拡張解釈かもしれないが、ここで言う使用とは、質の高い人間生活を営むためのものであると理解したい。

6. 入会の倫理的基盤

日本における共同利用できる林野などの「入会」に関しては、コモンズの場合とは異なった理解がなされている。秋道知彌〔1〕は、コモンズの訳語として共有があげられているけれども、日本語で言う入会は異なった意味であると指摘している。さらに、入会の英語はcommunalであり、誰でもがアクセスできるという意味ではなく、特定の人のみがアクセスできるという意味である。このような入会を理解するには、「なわばり」の概念が有効であることと秋道は主張している。

秋道によれば入会は「複数の個人や集団が、一定の領域において資源をともに利用する制度であり、その土地や水面が協同で利用されること」（秋道〔1〕156）である。加えて、入会の利用は、複数の個人や集団のみならず、公権力も利用できる。ともにみんなで利用できるとしながら個人の使用のみに限られているコモンズと比較して、このことは入会のもつ大きな特徴である。さらに、秋道は国という公に対する民間という私、都道府県という公に対する地域という私、地域という公に対する家族という私などのように公と私の境界があいまいであることを指摘する。しかも、土地利用において、この公私の境界が容易に変わることをフィールド調査事例等をもとに述べている。つまり、共同利用される土地と境界を設けて私的に利用される土地とが隣接しており、それが時間によって（部分的な場合もあるが）相互に入れ替わるという特徴をもっている。これを支える背景について秋道は次のように述べている。

「重要な点は、共有地というのは、人間のものではなくカミのものであるという思想である。人間が一時的にそれを借用し、使い終わるともとのようにカミに返すと考えられている。共有地のなかのなわばりとは、じつは自然のなかの一つの存在である人間のいとなみの場であった。」（秋道〔1〕165）

まとめれば、公私の境界をあいまいにしたままカミのものである土地を資源として限られた人々が活用してえられた生産物によって生活を享受するシステムが、入会であるといえることができる。

7. むすびにかえて

第2次世界大戦後のイギリスと日本における農業発展過程の差異は、5節と6節でみてきたコモンズと入会の倫理的基盤の現実的発現に対して異なる作用をもたらした。農村風景の修復・保全を例にみてみよう。

カントリーサイド・スチュワードシップ事業の担い手であるイギリスの地主層（の人々）は、長期間にわたる農村資源や田園風景を維持・保全する活動を通して、他の階層（の人々）や自然との関わり、つまり倫理についての思想を鍛えてきた。

しかも、地主層は現在執事（スチュワード）として活動することによって、単に農業・農村文化の形成に対する貢献というだけでなく、農業政策決定にも影響を与えることを狙っており、その意味で自らの社会的・政治的なアイデンティティーの確立を意識的に追求しているといえる（註5）。まとめれば、イギリスにおいて地主層は土地所有を媒介として個人の倫理から社会の倫理を経て土地の倫理へと繋がるルールを歴史的に形成してきたといえることができる。

一方、第2次世界大戦後の農地改革によって大地主の農地解放に伴い小規模な地主となった多くの日本の農民が、イギリスの地主層（の人々）のように田園地域の執事として意識的な活動をするということではなく、むしろ現在は伊藤房雄〔9〕が指摘するつぎのような状況にある（註6）。

「（略）農業の機械化・化学化と農村の就業機会の増大はあまねく兼業化をもたらし、伝統的な共同作業の実施を困難にした。それと同時に、安定的な兼業所得の獲得は、一所懸命に農業生産を行う必要性を薄れさせてきた。これにより農民の「公」と「共」意識は後退し、代わって「私」意識が全面に表れてきたように思われる。しかも、その「私」意識は、近年の耕作放棄地の増大に見られるように、農地を資産としての視点からだけ捉え、「公」に対する配慮もなしに自由に処分できるという自分勝手な「私」であり、ヨーロッパのそれと似て非なるものである。」（伊藤〔9〕28）

日本におけるこの現実、入会の私有化にも見られるように、2節で述べた欲望自由主義の論理の貫徹による私的空間の拡大に対応しているといえよう。

イギリスの地主の場合、大地主が依然として社会的な影響力を持っており、より広く農村を見て、かつ（政治力を維持するという面はあるにせよ）農村を世話する姿勢が生きているように思われる。一方、農地解放により自作地を獲得した多くの農民がいる日本の場合、かつて彼らのほとんどが小作人だったためか、自分の農地の修復・保全の視点はあるものの、広く地域資源に目配りし、その世話を自らかつてでるという姿勢が弱いといえる。

以上のような違いのため農村における風景の修復・保全という観点からイギリスと日本を比べた場合、日本でイギリスの地主のような農村資源や田園風景を維持・保全する執事（スチュワード）としての役割を農民に期待することには無理があるといえよう。したがって、このように日本における風景の修復・保全の担い手については別途検討が必要であるが、残された課題というには重い内容である。

註：1）ランドスケープ・エコロジーは訳語一つとってもランドスケープの理解を巡ってかなり錯綜した議論が行われており、統一した見解がないというのが現状である。ランドスケープ・エコロジーに関する著作としては沼田眞編〔17〕、武内和彦〔21〕、横山秀司〔27〕

等がある。

- 2) イギリスのカントリーサイド・スチュワードシップの概念とその事業についてはColman [2], Harrison-Mayfield et. al [4], 向井 [15], 柘植 [22], [23] を参照。
- 3) 以下のジョン・ロック所有権の思想に関する記述は一ノ瀬 [7], 下川潔 [20] を参考にした。
- 4) ロック的但し書きと土地所有の関係に関する記述は下川 [20] 147を参照した。
- 5) この点に関しては柘植 [22] より示唆を得た。また、1998年9月に英国マンチェスター大学を訪れた際にDavid Colman教授から農業政策をめぐる政治の分野では依然として地主層の影響力がある旨の話を伺った。
- 6) 社会全般の「私的領域の拡大と公的領域の縮小」については、間宮 [13] の議論が説得的である。

引用文献

- [1] 秋道知彌『小学館ライブラリー123 なわばりの文化史 海・山・川の資源と民族社会』小学館,1999.
- [2] Colman,D. ,"Ethics and Externalities," Journal of Agricultural Economics, Vol.45, No.3, 1994, 299-311.
- [3] Hardin,G.,"The Tragedy of the Commons," Science, Vol.162, 1968, 1243-1248.
- [4] Harrison-Mayfield, L., J. Wyer and G. Brookes, " The Socio-Economic Effects of the the Countryside Stewardship Scheme, " Journal of Agricultural Economics, Vol.49, No.2, 1998, 157-170.
- [5] 星野勉・三嶋輝夫・関根清三編『倫理思想辞典』山川出版社,1997.
- [6] 市川達人「環境, 所有, 風土」尾関周二編『環境哲学の探求』大月書店,1996,119-156.
- [7] 一ノ瀬正樹『人格知識論の生成—ジョン・ロックの瞬間』東京大学出版会,1997.
- [8] 井出 任「生物相保全機能」陽捷行編著『環境保全と農林業』朝倉書店,1998,107-118.
- [9] 伊藤房雄「農村景観を支える意識と制度」農林統計調査,Vol.49,No.8,1999,24-31.
- [10] 岩佐茂『環境の思想』創風社,1994.
- [11] 勝原文夫『農の美学』論創社,1979.
- [12] Leopold, A.『野生の歌が聞こえる』講談社学術文庫(新島義昭訳),1997.
- [13] 間宮陽介『同時代論—市場主義とナショナリズムを超えて』岩波書店,1999.
- [14] 宮田登『小学館ライブラリー93 「心なおし」はなぜ流行る』小学館,1997.
- [15] 向井清史「参加と交流による地域資源の保全と創造—イギリスのナショナル・トラスト運動」,今村奈良臣編著『全集 世界の食糧 世界の農村 地域資源の保全と創造』農山漁村文化協会,1995,63-142.
- [16] 西村幸夫『環境保全と景観創造—これからの都市風景へ向けて』鹿島出版会,1997.
- [17] 沼田眞編『景相生態学—ランドスケープ・エコロジー入門—』朝倉書店,1996.
- [18] 小田切徳美「中山間地の内発的発展の課題」総合研究開発機構・植田和弘共編『循環型社会の先進空間—新しい日本を示唆する中山間地域—』第2章,2000,43-64.
- [19] 佐藤俊樹『近代・組織・資本主義—日本と西洋における近代の地平—』ミネルヴァ書房,1993.
- [20] 下川潔『ジョン・ロックの自由主義政治哲学』名古屋大学出版会,2000.
- [21] 武内和彦『地域の生態学』朝倉書店,1991.
- [22] 柘植徳雄「イギリスにおける農地賃借権近代化の問題と農業環境問題」荏開津典生先生退官記念出版会編『変わる食料・農業政策—市場の機能と政府の役割—』大明堂,1996, 171-183.

- [23] 柘植徳雄「資本家的借地経営の土地問題とその後ーイギリス」犬塚昭治・柘植徳雄・中林吉幸・菅沼圭輔著『全集 世界の食糧 世界の農村 土地を活かす英知と政策』農山漁村文化協会,1998,80-138.
- [24] 内山節『自由論ー自然と人間のゆらぎの中で』岩波書店,1997.
- [25] 植田和弘『環境経済学 現代経済学入門』岩波書店,1996.
- [26] 山岸健『NHKブックス [673] 風景とはなにか 都市・人間・日常的世界』日本放送協会,1993.
- [27] 横山秀司『景観生態学』古今書院,1995.

追記

本稿は、下記の論文に新たな考察を加えて成った(科研費の)原稿を再度加筆修正した(3・4節及び5・7節の一部は旧稿を利用している).

長谷部正「農村風景と倫理」『農業経済研究別冊 2000年度日本農業経済学会論文集』2000, 186-190.